

弘前大学医学部と弘前大学総合情報処理センターとの関わり

医学部長 遠藤正彦

弘前大学計算センターが1967年に発足した当時、医学部キャンパスの電子計算機を使用する者は、センターに足を運んで利用していた。その後、1985年に情報処理センターへと改組拡充され、翌年には大型汎用計算機ACOS850の導入、N1ネットワークシステムによる全国共同利用大型計算機センターへの接続、学内光ネットワークシステムとその利用度が高まっていった。この時、光ネットワークの来ない医学部キャンパスでは、医学部と医療技術短期大学部が共同で本町地区情報処理検討委員会を設置し、情報処理環境の整備に一步を踏み出した。附属病院内に本町地区情報処理検討委員会を設置し、情報処理環境の整備に一步を踏み出した。附属病院内に本町地区端末交換システムを構築、これと情報処理センターを19200bpsの専用回線で結び、電話の空き回線を利用し、1200bpsのモデムを介して端末を交換機に接続する形態を作り上げた。このシステムはHUMAN (Hiroasaki University Medical Area Network) と名付けられ、MANT (Medical Area Network Terminal) と呼称する専用通信ソフトウェアも独自開発して無償配布するという画期的なものであった。HUMANにより一般研究の支援が行われた他、情報処理センターのデータベースを利用した動物飼育管理システムや学務課システムが稼働した。計算機が計算以外の目的に使われ始めたのである。

本町地区にも光ケーブルが1993年に敷設された。医学部にも8ポートHUBが100台以上設置され、研究室のパソコンからもインターネット接続ができるようになった。その結果、電子メールはある程度機密性が保たれ、世界中に数分で届くようになった。しかも無料という理由で大いに利用されるようになった。また、文献検索も二次資料のみでなく、NACSIS-ELSのような電子図書館の利用も可能になってきている。このころから情報処理センターは、重要ではあるが表面的に目立つことのないインフラストラクチャーという本来の姿になったように思われる。情報処理センターは1994年に総合情報処理センターに発展した。

医学部附属病院に昨年医療情報部が新設され、専任教授として羽田隆吉教授が就任した。医療情報部は医療情報学 (Medical Informatics), すなわち医学研究・医学教育・診療を支援するための情報に関する学問・技術を実践する部署であり、医学部並びに医学部附属病院における情報センターの役割を担っている。患者のプライバシーに関する事項を多く扱うため、この医療情報ネットワークはいまのところ総合情報処理センターとは連絡をもっていないが、将来的には総合情報処理センターとの連携の基に、益々の機能を発揮することが期待されている。